九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

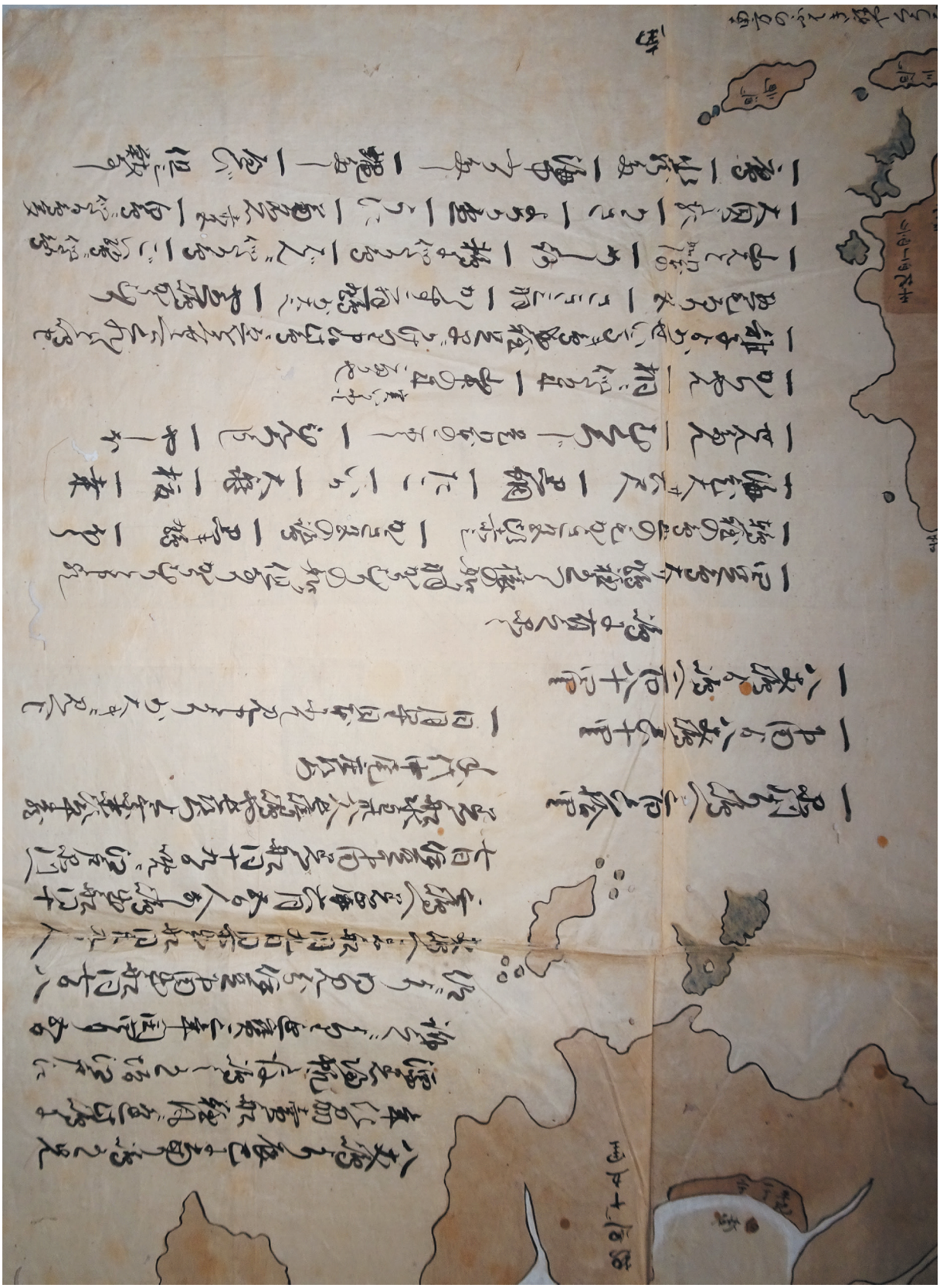
# 【史料紹介】本光寺所蔵「無人島之図」

松尾, 晋一
長崎県立大学地域創造学部 : 准教授

https://hdl.handle.net/2324/4123609

出版情報：長崎学 : 長崎市長崎学研究所紀要. 2, pp.71-80, 2018-03-31. 長崎市長崎学研究所
バージョン：
権利関係：

（写真１）「無人島之図」（全体）



（写真２）「無人島之図」（部分）

【史料紹介】

# 本光寺所蔵「無人島之図」

松尾　晋一

## はじめに

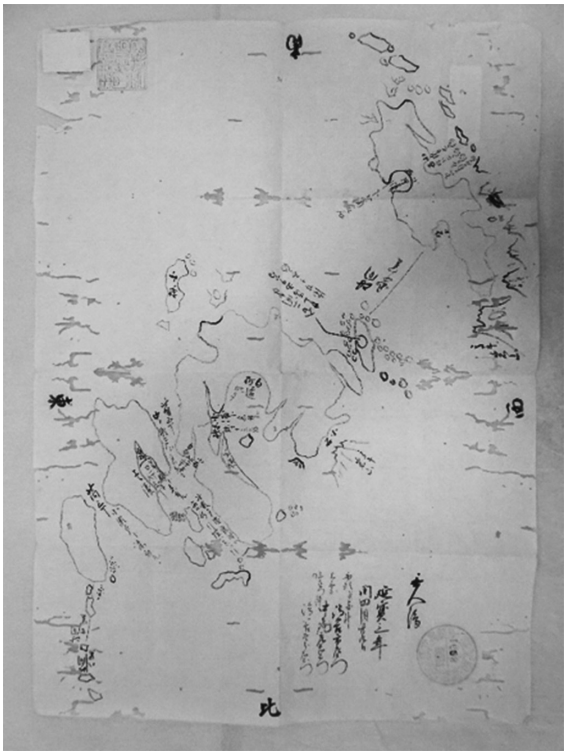
本文冒頭掲載の「無人島之図」（写真1）は、島原本光寺に所蔵されている。法量は、四一・八×五七・八糎で、一紙に書かれたものを、大小五枚の紙で裏打ちされている。この無人島とは、東京から南に約千キロ南に位置する現在の東京都小笠原村であり、北から聟島、弟島、兄島、父島、南島、母島、向島、平島、姪島、姉島、妹島にあたる島が描かれている。

「無人島之図」を所蔵している本光寺は、深溝松平家の菩提寺である。寛文九年（一六六九）に松平忠房は、島原（六五，九〇〇石）を拝領した。一時、宇都宮に入封するが、島原で明治維新を迎える。この松平家の史料の一部を所蔵するのが、本光寺である。[1] 松平忠房は、延宝三年（一六七五）の「無人島」への探検に用いられた「唐船造之船」の建造を命じられ、「無人島」の探検に手代中尾庄左衛門が参加した末次家との関係が深い。また、「長崎御用」を幕府から命じられ「長崎聞継」を長崎に派遣していた。[2] こうした事情や後述する青方家文書に同様の絵図があることを鑑みれば、松平家が様々な伝手からこの絵図を入手した可能性は高い。しかし本光寺所蔵資料が、一概に松平家に伝来した史料だけで構成されてはないことから、現段階では「無人島之図」を伝来不明としておきたい。

では、何故この絵図を史料紹介するのかというと、詳細については後述するが、これまで知られている秋岡武次郎氏がいう無人嶋精図[3]に記載されていない距離や地形以外の動植物に関する情報が、「無人島之図」に含まれているからである。

## 一、「無人島」への探検と絵図の類型化

まず絵図作成の背景について、長崎歴史文化博物館収蔵「無人島図」（四五×三二・二糎）[4] に記載されている情報を手掛かりに確認していく。同図は、長崎県の五島列島（北松浦郡新上五島町青方）を本拠としていた在地領主で、江戸時代には家老職を務めていた青方家の文書群のなかにある。これには、「無人島／延宝三年／閏四月廿九日／船頭幷安針／嶋谷市左衛門／上乗／中尾庄右衛門／市左衛門悴／同／嶋谷左郎右衛門」（／は改行）とあって、延宝三年（一六七五）に無人島（小笠原諸島）探検したものたちの名が書かれている。「閏四月廿九日」とは、父島に到着した日付である。



〔「無人島図」長崎歴史文化博物館収蔵〕

この船の「無人島」への派遣は、延宝二年（一六七四）、五月廿三日付で勘定奉行から長崎代官末次平蔵に伝えられていた。[5]その後、翌年になって勘定奉行所へ嶋谷市左衛門が召し出されて、勘定奉行の杉浦内蔵允（正昭）、徳山五兵衛（重政）、甲斐庄喜右衛門（正親）の三人立会いの下、辰巳の方角に知られていない島が存在するようなので、その確認をするように、と命じられた。この嶋谷市左衛門は泉州堺（大阪府堺市）生まれの航海術にたけた人物で、日本人の海外渡航禁止以前には中国大陸と日本との貿易に従事した経歴を持つ。[6]「無人島」への航海にあたっては帯刀を許され、役料五人扶持三十両、銀三十貫目分の貨物を下され、長崎で作られた「唐船造之御船」[7]で四月五日に伊豆下田を出船した。

同七日に八丈島、同九日にこの島を出船して二九日に父島へ至り、周辺の島の調査までして六月五日に江戸へ向けて島を離れた。同一七日に伊豆下田、同一九日には品川へ戻った。この航海では航路や島の情報も記録され、それらは幕府へ伝えられている。[8]帰帆の際には、現在の父島と母島にそれぞれ祠を建て、天照大神、八幡大菩薩、春日大明神の三社の神を祀った。また、島で採集した草木、鳥などを江戸へ持ち帰っている。[9]

この点は後ほど詳しく見ていくが、「柳営日次」の延宝三年（一六七五）六月廿一日条に、「一八丈嶋より巽之方洋中ニ嶋国有之、人倫不住、珍木珍鳥等有之間、先年紀州商船漂着彼嶋右之旨趣依申之、去年五月仰伊奈兵右衛門唐船造之船差渡、彼嶋頃日帰帆、珍木珍鳥其外色々珍物依持来今日献上之」[10]とある。そして同月廿九日に、これらを将軍家綱が上覧した。[11]幕府にとって嶋谷を無人島へ派遣したことは、一大イベントであったことが以上から知れよう。

ではつぎに、この航海で作成された絵図に関する先行研究の成果をふまえて、「無人島之図」について考えてみたい。秋岡武次郎「小笠原諸島発見史の基本資料、地図について（一）」[12]によると、秋岡氏所蔵の「嶋谷市左衛門無人嶋へ乗渡覚書」には、「嶋屋市左衛門無人嶋乗前図」（四〇・八×二八七糎）と「南海無人嶋地図」（七七・五×五三・五糎）の二地図が添えられていて、前者が伊豆の下田から無人嶋までの総図、[13]後者が無人嶋精図というべきものだと説明されている。秋岡氏は、前者を「第一種」、後者を「第二種」と表現して区別されていて、[14]これを踏まえると、ここで紹介する「無人島之図」は後者のものとなる。

この図と同様の無人嶋精図は数点確認されていて、南波松太郎氏蔵「南海無人嶋地図」（八二・四×八〇・三糎）、同「辰巳嶋之図」（八二・四×八〇・三糎）、同「無人嶋全図」（一〇四・五×九二・五糎）、木村東一郎氏蔵「無人嶋全図」（四七×三八糎）、[15]長崎歴史文化博物館収蔵「無人島図」、田中弘之氏蔵図[16]である。「無人島図」以外は彩色が施されているが、構図は二系統に分かれていて、本光寺蔵「無人島之図」、南波松太郎氏蔵「辰巳嶋之図」、長崎歴史文化博物館収蔵「無人島図」、田中弘之氏蔵図の四点が同一である。

秋岡氏は「無人嶋全図」の評価として、「第一種無人嶋乗前図の図形に最も近く、嶋谷原図を忠実に書写していると言える。」と書いている。[17]この評価に従うならば、本光寺所蔵「無人島之図」も同様の価値を持つ絵図と言えよう。

## 二、絵図から得られる情報

「無人島之図」と同一の構図を持つ絵図は、現時点で四点となる。しかし、それぞれの文字情報は異なる。[18]「無人島図」は先述した通りで、田中弘之氏蔵図は地形情報のみである。「辰巳嶋之図」につ

いては秋岡氏が紹介していて、例えば「延宝三年卯閏四月五日下田出船、同廿九日彼嶋江着津、当六月三日彼嶋出船、同十八日ニ下田江着津、十五里廻りの嶋一ツ、十里廻りの嶋七ツ、七里廻りの島一ツ、五里四里三里廻りの嶋五ツ、五町三町廻りの島三拾程、道法三百四十里、□水も沢山、林木名ノ知レ不申木沢山御座候、知木ハやし・を山びんろうじ・むくろうじ・桑・榎・せんたんほとの大木、鳥類ハはと・さぎ・目白・□□いんこに似たる鳥、りうきうかうむら人え四五人乗申候も知れざる程成とうがめ、もろもろの鳥など少しも人をおじ不申、手にもとまり申様御座候也」[19]などとある。

これに対し「無人島之図」の記載内容は、つぎの通りである（写真2）。

八丈島より辰巳に当り嶋有、先／年紀州賣船難風ニ逢、此嶋に／漂着、帰帆之後嶋之有増江戸江／訴之ニより延宝三年閏四月五日／仰ニより為見分伊豆下田出船、同七日八丈／島へ着船、同九日同所出船、同廿九日人／無嶋へ着岸、六月五日人なし嶋出船、同十／七日伊豆下田着船、同十九日晩ニ江戸品川へ／着船、水主弐八人、長崎嶋や長（ママ）左衛門、上乗末次平蔵／手代中尾庄左衛門

一日・月・星、日本にて見申候より少大キニ見へ申

一品川より嶋へ三百六拾里

一下田ゟ八丈島六拾里

一八丈島ゟ嶋へ二百八十四里

嶋に有之品々

一四足鳥大サ鳩程有、つら猿の如ク羽かうむりの如ク、但なりかうむりと申候哉／一鶇程の鳥惣の毛、かき色頭赤し　一かき色の鷺　一黒キ鳩　一ほう／一海老大サ六尺　一黒鯛　一たこ　一いか　一大亀　一榎　一桑／一せんだん　むくろじ

是日本のことし　一もんろうし　一やしほ／一からやん　一桐ニ似たる木　一山（さんしょうか）□の木、実いかにもこまか也

一雉子[20]ゟ少せい高キ鳥成程足早ニかけり申候、此鳥ニえさみせ候へハくれゝと鳴申候、／惣毛るり色　一さき三羽　一からす二羽　一鳩少大也　一や久嶋かうむり／一山はと、日本の如し

一めしろ　一鵜ににたる鳥　一ばんニにたる鳥　一ごい　鷺ニ似たる鳥／一大貝之類　一かき　一よめか盃　一うに　一菊名石　赤色　一白鳥ニにたる鳥多／一鷹　一水龍多　一海中ふか多し　一蠅多し　一へび　但シ獣なし　（／は改行）

島への船の派遣、島への距離、島の動植物といった三つの情報から構成されている。まず、島への船の派遣についてだが、「先年紀州賣船難風ニ逢、此嶋に漂着」とあるのは、寛文九年であり、阿州浅川浦（徳島県海部郡海陽町）の船が紀州国宮崎（和歌山県有田市）にて蜜柑を積んだ船が志州安乗浦より出帆して江戸へ向かったところ、難破して島（母島）へ漂流したことである。これを契機として、無人島への船の派遣に幕府が動き出した[21]。それ以後の日程は「山角氏覚書」[22]「玉露叢」[23]と一致する。水主については、「小笠原紀事　巻之廿六」[24]に「唐船御船人数付」があり、これから乗船者の詳細が確認できる。水主の人数は、これと一致する。つぎに「長崎島や長左衛門」とある。これは単なる誤記のほか、寛文九年船が遭難して現在の小笠原諸島に漂着したことを先述したが、その際の送荷を依頼

した荷主が長左衛門というからこの人物と誤った可能性もある。[25]最後に、「一日・月・星、日本にて見申候より少大キニ見へ申」とあるが、これも「山角氏覚書」「玉露叢」に見られる。

島への距離だが、品川からの距離については他の史料から確認できない。下田から八丈島は「島谷市左衛門無人島へ乗渡覚書」[26]によると「六十六里」とあり、八丈島より「嶋」とあるが「二百八十四里」に相当する島として「南ノ無人島」との記載が確認できる。従って、この島は母島にあたるかもしれない。距離については、他の史料との微妙な誤差があることは、間違いない事実である。

では、島の動植物に関する「嶋に有之品々」を確認していく。「嶋谷市左衛門無人島へ乗渡覚書」に幕府へ差し上げたものとして、「五位鷺ニ似申候鳥、バンニ似タル鳥、インコウニ似申鳥、目白ニ似申鳥、カウムリニ似申鳥、鵜ニ似申鳥、山帰来（さんきらい）、山柿ノ実、カツラノ実、ヒンロウジノ実、ヤシホノ実、同花、シヤクシヤノ如クナル木ノ実、藤ノ葉ノ如クナル木ノ実、楠ニ似タル木ノ実、カツラノ実、サイカチ、トフキニ似タルモノハセヲノ実、カチヤンノ実、ムクロウジ、コヤス貝、カキガラ、ウニ、ヨメカヅラ、明礬マジリノ礬、赤石、白石、青石、海老、菊面石、カチヤンノ木、名不知木目木、ヒンロウジ、楠ニ似タルモクノ木、ヤシホノ葉、ヒンロウノ葉、ヒンロウジ植木、ヤシホ植木、カチヤンノ木、縮砂（しゃくしゃ）ニ似タル木、楠ニ似タルナヘ木、アサガホ」とある。[27]一見して、内容が異なることがわかる。つまりこの「無人島之図」に記載されているものは、幕府へ献上したものが記されているわけではないことになる。

ここで参考にしたいのが、鈴木惟司の研究である。[28]氏によると、「島谷市左衛門覚書」[29]、「延寳無人島巡査記」[30]、「延寳無人島順見記」[31]、「延寳無人島巡見記」[32]、「嶋谷市左衛門無人嶋江乗渡覚書」[33]、「小笠原紀事巻之貳」[34]「嶋谷市左渡嶋之話」[35]（同氏は、「第一種巡検記録」とする）と「人無島渡海之覚」[36]（同氏は、「第二種巡検記録」とする）は異なるもので、後者は「無人島における観察記録」としている。[37]

さらに「人無島渡海之覚」を「山角氏覚書」「慶延略記」「玉露叢」と比較分析され、「基本的には「山角氏覚書」の「人無島渡海之覚」を書写した文書であると判断される。」との意見を述べられている。「山角氏覚書」[38]の記載は、つぎの通りである。

一元島（長拾六里横二里）程、前後湊二有之、此嶋ニ有品々、
一四足之鳥大さ鳩程、つらハ猿のことく、羽はかふむりことく、
　但、是琉球のかふむりのよしニ候、
一海老　大さ六尺程、　一かき色の鷺、一黒鳩大キ也、
一目白大キ也、　一鳶　一亀、
一魚　一檳榔樹の木、一やしほの木、
一桐ニ似申す候木、　一かしやんの木しやかかしらのことく
　成る実なり申候、
一桑の木、　一せんたんの木、一榎の木、
一山椒ノ木（実いかにも、こまか也）、一めうばん（明礬）、一ろうはん（緑礬）
　右元嶋の近所ニ小嶋十六有之、
一沖之嶋廻り十八里程、湊弐ツ有、此嶋ニ有之品々
一雉子ニ少ちいさき鳥、（せい高く惣毛るり色、足赤く成程足はやにかけ、り候、えさを見せ候へば、くれ〳〵となき申候）
一黒鳩、一ひんろうしの木、一やしほの木、
一かちやんの木、一犬ゆつりはニ似申候木、柿のことく成実な
　り申候、
一二かい程の大木葉はさゝけニに似申候、実も同似申候、
　右沖の嶋近所に小嶌有之、

ここでの「元嶋」が父島、「沖之嶋」が母島にあたるが、今回紹介している「嶋に有之品々」をみると、「からやん」の行までが「元嶋」、それ以後が「沖之嶋」の記載内容と類似することがわかる。こうした区別をすることで、動植物が不規則に記載されていることに説明がつけられる。ここで紹介している「無人島之図」は、島の観察で得られた情報を加えた記録と言えよう。しかし課題は、この「嶋に有之品々」にのみ記されている情報の扱いである。鳥については、鈴木氏の一連の研究があるからそれらを参照いただきたいが、[39] 例えば「へび」とあるものの、蛇は小笠原で生息していないそうである。そのため、ウミヘビだと安易に考えてみたが、「但し獣なし」とあるから、陸に生息するものであることは間違いあるまい。ここに書かれていることを当時の人が記した情報だと仮に考えて、「へび」に見えたものは一体何であったのか。この点は、その分野の専門家に分析を託したい。

なお、「辰巳嶋之図」にも確かに島の観察をふまえた情報が記入してあるが、島ごとに区別された情報ではないわけで、「無人島之図」とは異なる系統で作成された可能性が考えられる。

ところで、この「無人島之図」の「南」の横に「南方のふはきねや、くろほうの居国有」と書かれている。正保二年（一六四五）に長崎で「万国総図」が木版で出版されていて、そのなかに「ノウバキネヤ」が日本から南方に位置する大陸にある国の一つに挙げられている。当時の世界地理を元禄八年（一六九五）に出版された「華夷通商考」にこの地名は記されていないが、「増補華夷通商考」（宝永五年・一七〇八）には、日本の南方にメカラニアがあり、その海辺に開かれた国として「ノバギネヤ」が紹介されている。[40] おそらくこれにあたるのだろう。

この探検に参加したものの知識か、それとも絵図の作成時に携わったものの知識か、はたまた絵図を写したものの知識かわからない。しかしいずれにしても、世界地理に精通したものが「無人島之図」の作成に関係したことだけは間違いない。

## おわりにかえて

かつて家綱政権の南蛮船対応策を分析した際、南蛮船の来航を禁止する幕府の方針が固められたのが家光政権ではなく家綱政権であったことを明らかにした。[41] この結論は、外の世界との関係を限定していく動きとして捉えられる。では、ここで紹介している「無人島之図」が作成されるに至った「無人島」への探検、つまり外の世界への興味関心とそれにともなう動きとの関係を、どう理解すればよいのだろうか。

当該期の東アジアは、明清交替に伴う変動期で国家間の関係再編が見られ、決して安定した状況にはなかった。こうした状況下で、幕府は長崎での貿易と、異国船、異国人の掌握を試みていった。[42] 南蛮船の来航禁止など、この幕府の試みの基底には、もちろんキリスト教厳禁政策の徹底があったものの、外の世界との接触に決して消極的な姿勢で臨んでいたわけではない。そのことを証明しているひとつの事例が、延宝三年の「無人島」への探検と理解すべきではなかろうか。

（長崎県立大学地域創造学部准教授）

## 注

1 『島原市本光寺所蔵古文書調査報告書』島原市教育委員会、一九九四年。

2 松尾晋一「江戸幕府の長崎支配と大名課役―松平忠房の「長崎御用」を事例に―」『長崎県立大学国際情報学部研究紀要』一五号、二〇一四年。

3 秋岡武次郎「小笠原諸島発見史の基本資料、地図について（一）」『海事史研究』一、一九六三年。秋岡武次郎編著『日本古地図集成』（鹿島研究所出版会、一九七一年）所収の『日本地図作成史』に秋岡武次郎の序文がある。その第六編第三章「日本本土沿海の諸島嶼の日本領経過」第一節「小笠原諸島発見史の基本資料、地図について」。

4 長崎歴史文化博物館収蔵、青方3　38。

5 大熊良一『小笠原諸島異国船来航記』しなの出版、一九六九年、一六三頁。

6 校訂者森永種夫・丹羽漢吉『長崎港草』長崎文献社、一九七三年、一〇七頁。若木太一ほか編『長崎先民伝注解』勉誠出版、二〇一六年、一五一～一五三頁。浦川和男「延宝無人島巡見船の船頭は誰か」（『海事史研究』五八号、二〇〇一年）も参照されたい。丹羽漢吉・森永種夫校訂『長崎実録大成』（長崎文献社、一九七三年、三四四頁）には、つぎのように記録されている。

（寛文十年）

一去年仰付ラレシ唐船造ノ御船一艘、但五百石積、当三月成就ス、御船頭当地島谷市左衛門ニ被仰付、三月廿六日長崎湊出船シ、四月十日江府着船ス、

（延宝三年）

一今年於江府、唐船造ノ御船ニテ島谷市左衛門無人島ニ乗渡リ、見届可来旨被仰付、閏四月五日伊豆下田ヨリ出船シ、同廿九日彼島ニ着岸シ、五月中諸處見分シ、六月五日彼島ヨリ出船シ、同廿日江戸表ニ着船セリ、彼島ヨリ珍奇ノ鳥類木石等持来ル由也、

7 船名はなく、天和元年（一六八一）五月十二日長崎の御船蔵に廻され、十九日～二十九日で解体された（「文化元子四月写之「船手関係記録」」長崎歴史文化博物館収蔵）。

8 浦川和男「小笠原諸島発見史（日本船編）」『ＬＡ　ＭＥＲ』二〇七号、二〇〇一年。

9 「嶋谷市左衛門無人島へ乗渡覚書」（「小笠原紀事　巻之二十六」国立公文書館所蔵）。

10 国立公文書館所蔵。

11 『通航一覧　八巻』国書刊行会、一九一二年、附録巻十二、四〇一頁。

12 『海事史研究』一、一九六三年。

13 金井俊行が献納した「小笠原島記　全」（長崎歴史文化博物館収蔵、290-3-1）にも掲載されているが、無人島精図。

14 前掲秋岡武次郎「小笠原諸島発見史の基本資料、地図について」。

15 前掲「小笠原諸島発見史の基本資料、地図について」に、南波松太郎氏蔵「南海無人嶋地図」、同「辰巳嶋之図」、同「無人嶋全図」、木村東一郎氏蔵「無人嶋全図」が白黒で掲載されている（同一二六・一二七頁）。

16 「無人嶋之絵図」『別冊太陽　日本の探検家』。浦川和也「嶋谷市左衛門」同一四二・一四三頁。

17 前掲秋岡武次郎「小笠原諸島発見史の基本資料、地図について」。

18 文字情報を、紙幅の関係上本文中に総て紹介しない。前掲秋岡武

次郎「小笠原諸島発見史の基本資料、地図について」を参照されたい。

19 前掲秋岡武次郎「小笠原諸島発見史の基本資料、地図について」。

20 キジの古名。

21 前掲浦川和男「小笠原諸島発見史（日本船編）」。寛文九年のことは浦川和男「寛文年間紀州蜜柑船母島漂着《1》—初めて小笠原諸島を発見した日本の記録」を参照されたい。

22 国立公文書館所蔵。

23 山本武夫（校注）『玉露叢　下巻』新人物往来社、一九六七年。

24 国立国会図書館所蔵。

25 前掲秋岡武次郎「小笠原諸島発見史の基本資料、地図について（一）」。

26 前掲「嶋谷市左衛門無人島へ乗渡覚書」。

27 前掲「嶋谷市左衛門無人島へ乗渡覚書」。

28 鈴木惟司「覚え書き：江戸時代初期小笠原で日本人船乗りたちが出会った鳥（その1）」『小笠原研究年報』二五、二〇〇二年。同「覚え書き：江戸時代初期小笠原で日本人船乗りたちが出会った鳥（その2）」『小笠原研究年報』二六、二〇〇三年。同「覚え書き：江戸時代初期小笠原で日本人船乗りたちが出会った鳥（その3）」『小笠原研究年報』二七、二〇〇四年。

29 前掲「小笠原紀事　巻之二十六」所収。

30 前掲「小笠原紀事　巻之二十六」所収。

31 国立公文書館所蔵。

32 西尾市立図書館岩瀬文庫所蔵。

33 秋岡武次郎「小笠原諸島発見史の基本資料、地図について（三）」『海事史研究』九、一九六七年。

34 国立公文書館所蔵。

35 前掲『長崎港草』

36 『通航一覧　第八』国書刊行会、一九一三年。

37 前掲鈴木惟司「覚え書き：江戸時代初期小笠原で日本人船乗りたちが出会った鳥（その3）」。

38 国立公文書館所蔵。

39 鈴木惟司「江戸時代の探検隊がみた小笠原の鳥」『ＬＡ　ＭＥＲ』二〇一一年ほか。

40 川村博忠『近世日本の世界像』ぺりかん社、二〇〇三年。西川如見著、飯島忠夫・西川忠幸校訂『日本水土考・水土商考』岩波書店、一九九七年。

41 松尾晋一「家綱政権期の南蛮船対応策—政策の転換と沿岸警備体制の整備」『歴史評論』六四四号、二〇〇三年。

42 松尾晋一「幕府対外政策と東アジア再編：異国船問題の政策継承」『歴史学研究』九二四号、二〇一四年。

〔付記〕

「無人島之図」に記載された情報が自分の分析能力を超える内容であることを、実際小笠原村父島を訪れて知った。「へび」については本文中で述べたが、この史料紹介を機に分析が進展することを、切に願う。その意味で画像の本誌掲載を許された本光寺住職片山弘賢氏、画像のカラーでの掲載を認めてくださった土肥原弘久氏をはじめとする長崎市長崎学研究所の皆様、そして東京都小笠原村で情報提供くださった小笠原村教育委員会事務局教育課長持田憲一氏、元小笠原村職員延島冬生氏には、記して謝意を表したい。

本研究は、平成二九年度長崎県立大学学長裁量研究費「離島探検の基礎的研究」、および JSPS 科研費 15K02868、「大陸情報と江戸幕府の対外政策」の助成を受けたものである。